オセアニア[ＮＺ]

1　農・畜産業の概況

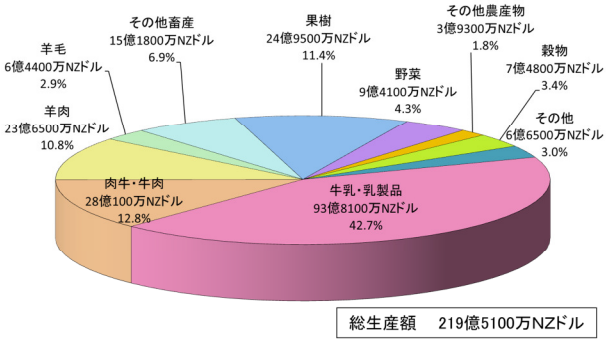
ニュージーランド（ＮＺ）は、温暖な気候と豊かな土壌に恵まれ、国土面積（2680 万ヘクタール）のうち、約５割に当たる 1410 万ヘクタールが農地となっている農業立国である。

また、人口が約 460 万人と国内の市場規模が小さいため、農畜産業は貿易に依存した構造となっており、農畜産物の輸出額（FOB）は全体の５割以上を占めており、外貨獲得上、重要な地位にある。

畜産部門は、農畜産業粗生産額、農畜産物輸出額の７割以上をともに占めている。特に酪農・乳業は、農畜産業粗生産額、農畜産物輸出額の４割以上を占めており、ＮＺ農畜産業の基幹部門である。

2014／15 年度（４月～翌３月）の農畜産業粗生産額は、219 億 5100 万ＮＺドル（前年度比 17.4%減、推計）となった（図 1）。

図１　農畜産業粗生産額（2014／15 年度）

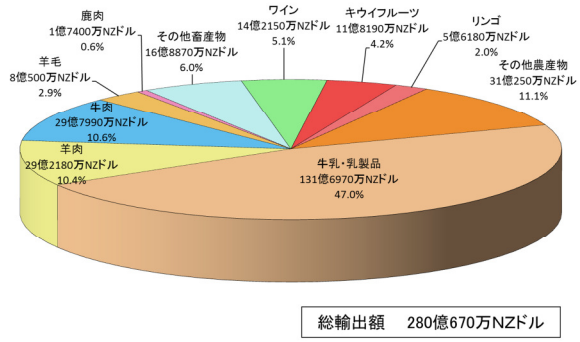


資料：ＮＺ１次産業省「Situation and Outlook for Primary Industries」
注：年度は４月～翌３月。

この減少は、乳製品国際価格の下落に伴い、基幹部門である牛乳･乳製品の生産額が下落した（93 億 8100 万豪ドル、同 36.7%減）ためとみられる。一方、肉牛・牛肉は、28 億 100 万ＮＺドル（同 29.3%増）と、米国向け需要の高まりを受けて大幅に増加した。羊肉は 23 億 6500 万ＮＺドル（同 1.1%増）とわずかに増加し、羊毛は６億 4400 万ＮＺドル（同 12.4%減）とかなり大きく減少した。

2014／15 年度（７月～翌６月）の農畜産物輸出額（ＦＯＢ）は、280 億 670 万ＮＺドル（同 7.2%減）とかなりの程度減少した（図 2）。

図２　農畜産物輸出額（2014／15 年度）



資料：Beef ＋ Lamb NZ「Compendium of New Zealand Farm Facts」
注：年度は７月～翌６月。

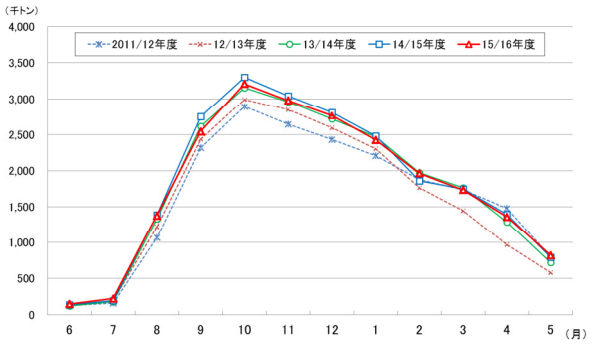
粗生産額同様、乳製品国際価格の下落、なかでもＮＺの主力製品である全粉乳の国際価格の下落が減少の背景にある。牛肉は、米国や中国の需要に支えられて、前年度に引き続きわずかに増加した。品目別輸出額を見ると、牛乳・乳製品は 131 億 6970 万ＮＺドル（同 21.9%減）、牛肉（子牛肉含む）は 29 億 7990 万ＮＺドル（同 35.5%増）、羊肉（ラム・マトン）は 29 億 2180 万ＮＺドル（同 1.7%減）、羊毛は８億 500 万ＮＺドル（同 9.8%増）となった。

2　畜産の動向

（1）酪農・乳業

ＮＺの酪農は、温暖で降水量に恵まれた自然条件を生かし、草地を最大限に利用した放牧中心の飼養形態である。このため、年間の生乳生産は、牧草の生育状況と密接に連動しており、早春となる８月から搾乳を開始し、10 月から初夏となる 12 月に生乳生産のピークを迎え、その後、次第に減少して５月ごろにはほとんどが乾乳してシーズンを終えるという、明確な季節型生産体系となっている（図 3）。そのため、生乳生産の中心となる９月から翌２月の６カ月間に、年間の約４分の３の生乳を生産する。

図３　生乳生産量の推移



資料：Dairy Companies Association of New Zealand
注：年度は６月～翌５月。

ＮＺでは、放牧中心の飼養形態により、生乳生産のコストは、世界的に見て最も低い水準にある。生産量の 95%が輸出に仕向けられる乳製品は、ＮＺの農産物輸出額の約半分を占めており、酪農・乳業部門は、ＮＺの基幹産業の一つとして位置付けられている。

ＮＺは、生乳生産量では全世界の約 4%を占めるにすぎないが、世界最大の乳製品輸出国である。特にバターおよび全粉乳の国際市場でのシェアは６割を超える。国内市場の規模が小さいため、生乳生産者価格や乳製品価格は、いずれも国際市場の影響を強く受けやすい構造となっている。

①　主要な政策

酪農・乳業に対する国内の価格支持政策は存在しない。ニュージーランド・デイリーボード（ＮＺＤＢ）が、2001 年９月まで、乳製品の一元輸出機能を持っていたが、同年 10 月、２大酪農協とＮＺＤＢの販売機能を取り込んだ巨大酪農協（乳業メーカー）フォンテラが誕生し、酪農産業の再編が行われた。

フォンテラの誕生と同時に 2001 年、生乳および乳製品市場での競争の促進を目的とした酪農産業再編法（Dairy Industry Restructuring Act 2001）が成立した。同法には、フォンテラの寡占による弊害を回避するため、乳業メーカーの新規参入機会の付与が盛り込まれている。フォンテラには、集乳量のうち一定量の生乳を他社に供給することが義務付けられている。ＮＺにおけるフォンテラの寡占度は、８割以上と依然として高いものの、近年は徐々に低下してきており、この義務付けについても、今後撤廃する方針が示された。

②　生乳の生産動向

乳用経産牛の飼養頭数は、酪農産業の再編による競争力の向上や国際的な乳製品需要の増加を背景に、増加基調で推移している（図 4）。また、羊・肉用牛部門から収益性に勝る酪農部門への転換が進んでいることも、飼養頭数増加の要因となっている。

ＮＺの酪農は、降水量に恵まれた北島のワイカト地域などを中心に行われてきた。しかし、近年では、乳製品の国際価格の高騰を契機に、南島のカンタベリー地域などでかんがい施設が整備されて酪農が盛んになったことから、特に南島での頭数拡大が著しい。2014／15 年度（６月～翌５月）の経産牛飼養頭数は 501 万 8000 頭（前年度比 1.9%増）、このうち北島は 302 万 1000 頭（同 1.0%増）、南島は 199 万 7000 頭（同 3.3%増）と、南島の方が、増加幅が大きくなっている（表 1）。

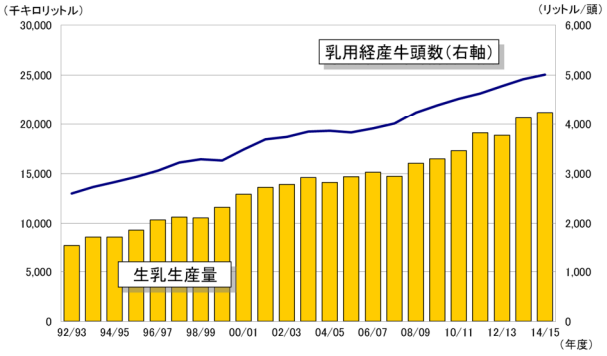
表１　地域別の飼養戸数・頭数・規模の推移

地域・区分／年度		2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15
北島	飼養頭数（千頭）	2,906	2,914	2,955	2,990	3,021
	飼養戸数（戸）	8,947	8,912	8,912	8,859	8,818
	1戸あたり飼養頭数（頭）	325	327	332	338	343
南島	飼養頭数（千頭）	1,623	1,721	1,829	1,933	1,997
	飼養戸数（戸）	2,788	2,886	2,979	3,068	3,152
	1戸あたり飼養頭数（頭）	582	596	614	630	634
合計	飼養頭数（千頭）	4,529	4,634	4,784	4,923	5,018
	飼養戸数（戸）	11,735	11,798	11,891	11,927	11,970
	1戸あたり飼養頭数（頭）	386	393	402	413	419

資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」
注１：年度は６月～翌５月。
　２：各年 12 月末時点。
　３：頭数は当該シーズンに搾乳された乳用牛頭数。
　４：１戸当たり飼養頭数の「合計」は、北島と南島全体の平均。

飼養規模の拡大に加えて、補助飼料の給与増加による１頭当たり乳量の増加により、生乳生産量は右肩上がりの推移となっている（図 4）。2014／15 年度は、乳製品国際価格は下落に転じたものの、比較的良好な気候条件などを受けて、１頭当たり乳量は 4235 リットル（同 0.9%増）、生乳生産量は 2125 万 3000 キロリットル（同 2.9%増）とともに前年度に続き増加した。

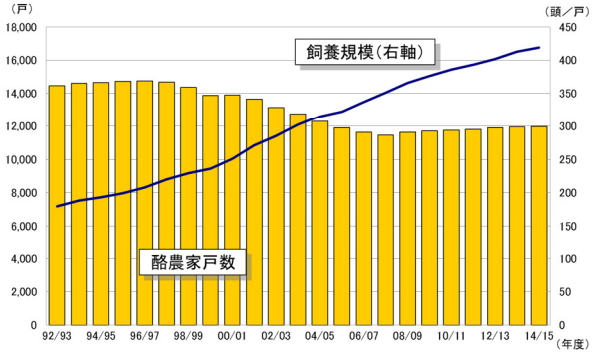
図４　乳用経産牛飼養頭数と生乳生産量の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」
注１：年度は６月～翌５月。
　２：乳用経産牛頭数は 12 月末時点。

酪農家戸数は、2007／08 年度に乳製品の国際価格が高騰してからは増加が続いており、2014／15 年度は１万 1970 戸（同 0.4%増）と７年度連続で前年度を上回り、１戸当たり経産牛飼養頭数も、規模拡大による増加が続いており、2014／15 年度は 419 頭（同 1.5%増）となった（図 5）。1000 頭以上を飼養する経営が全体に占める割合は 5.1%と、２年度連続で増加している。

図５　酪農家戸数と飼養規模の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」
注：年度は６月～翌５月。

③ 牛乳・乳製品の需給動向

ＮＺでは、最大手の乳業メーカーであるフォンテラが約９割の乳製品生産シェアを占める。

輸出相手国は、フォンテラの企業戦略と相まって、中国、東南アジア、中東、北アフリカ、ＥＵ、北米など世界 140 カ国に及んでいる。フォンテラは、2002 年に世界的な大手食品メーカー「ネスレ」と合弁企業を設立し、2003 年 1 月から、中南米の市場での乳製品製造・販売を手がけている。また、2007 年には、中国で牧場を建設し生乳生産を開始するなど、国際市場への積極的な進出を図っている。

2014／15 年度（7 月～翌 6 月）の主な乳製品の輸出量は、中国の需要急減を背景に、全粉乳は 136 万 4000 トン（前年度比 3.1％減）、バターは 47 万 5000 トン（同 4.1％減）と前年度を下回った。一方で、脱脂粉乳は 41 万 5000 トン（同 15.4％増）、チーズは 30 万 3000 トン（同 13.9％増）と前年度を上回った（表 2）。乳製品国際価格の下落を受け、今後は、乳幼児や成人向けの高栄養価粉ミルクといった付加価値の高い乳製品の製造部門を強化するなど、乳業メーカーは対応を迫られている。

表２　生乳生産量および乳製品輸出量の推移

（単位：千頭、千キロリットル、千トン）

区分／年度		2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15
経産牛飼養頭数		4,529	4,634	4,784	4,923	5,018
生乳生産量		17,339	19,129	18,883	20,657	21,253
輸出量	バター	394	442	462	495	475
	チーズ	248	275	310	266	303
	全粉乳	1,068	1,126	1,281	1,407	1,364
	脱脂粉乳	349	349	413	360	415

資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」、Statistics New Zealand

注１：経産牛飼養頭数は各年度 12 月末時点、単位は千頭。

２：生乳生産量は６月～翌５月、単位は千キロリットル。

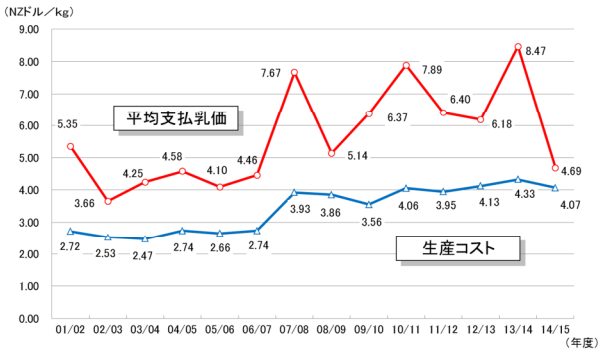
３：乳製品輸出量は７月～翌６月、単位は千トン。

④ 乳価の動向

生乳生産者価格（平均支払乳価）は、乳製品の国際相場や為替相場（ＮＺドル）の動向などに左右される。2014／15 年度（6 月～翌 5 月）の平均支払乳価は、世界的な乳製品生産の増加や、主要な乳製品輸入国である中国などの輸入需要の減速を背景に乳製品国際価格が下落したことを受け、乳固形分 1 キログラム当たり 4.69ＮＺドル（前年度比 44.6％安）と大幅に下落した（図 6）。

一方、2014／15 年度の生産コストは、同 4.07ＮＺドル（同 6.0％減）となった。放牧中心の低コスト生産が特徴のＮＺ酪農においても近年は、生産コストは微増傾向で推移してきたが、支払乳価の引き下げを受けて酪農家の生産意欲が減退し、補助飼料の給与やかんがい設備への投資などが抑制されたためとみられる。

図６　生産コストと平均支払乳価の推移（乳固形分ベース）



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」、「Economic Survey」

注：年度は６月～翌５月。

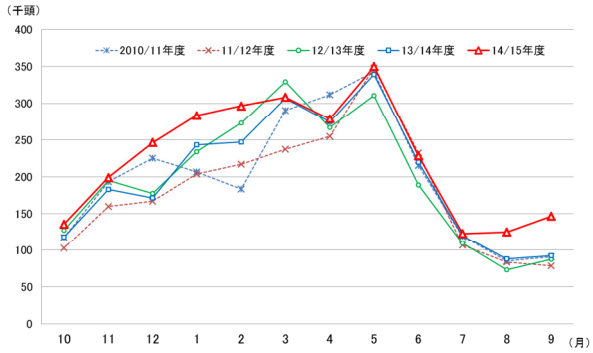
（2）肉牛・牛肉産業

ＮＺの肉用牛生産は、草地に依存した生産体系となっており､フィードロットでの穀物肥育による生産は、ごくわずかである。

牛肉生産が酪農の動向と密接に連動していることは、ＮＺの肉牛・牛肉産業の特徴の一つである。

年間の成牛と畜頭数の推移を見ると、と畜頭数は生乳生産が終了する５月にピークを迎える。これは、乾乳期に入るのに合わせて、乳用牛の淘汰が増加するためである。その後、と畜頭数は冬に向けて大きく減少し、８月から９月は、ピーク時の３分の１程度にまで減少する（図７）。

図７　成牛と畜頭数の推移



資料：Statistics NZ

注：年度は 10 月～翌９月。

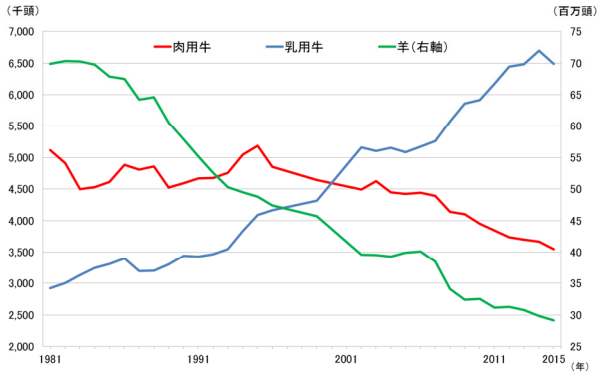
また､肉用牛として飼養される牛の３分の１程度は、乳用種または交雑種（乳用種×肉用種）となっている。酪農部門から供給される乳用種の雄牛は、多くは子牛肉用として出荷されるものの、一部は去勢せずに飼養され、乳用経産牛と同様に加工用牛肉（挽き材用）として、ＮＺ最大の輸出市場である米国を中心に輸出されている。このように、酪農部門は、牛肉供給の面でも重要な役割を担っている。

ＮＺの牛肉産業は、国内の市場規模が小さいことから、酪農産業と同様に輸出依存度が高く、生産された牛肉のうち、枝肉重量ベースで９割程度が輸出に仕向けられている。このため、肉牛・牛肉産業も、国際市場の影響を強く受けている。

①　牛の飼養動向

肉用牛の飼養頭数の推移を長期的に見ると、収益性の悪化による経営規模の縮小や、酪農や林業などの、より収益性の高い部門への転換などを背景として、1995 年の 518 万頭をピークに右肩下がりとなっており、2000 年には右肩上がりに増加している乳用牛と逆転した。特に 2007 年以降は、国際乳製品価格の高騰から、土地利用の酪農への転換が一層進んでおり、乳用牛の増加と、肉用牛の減少の傾向が強まっている（図８）。

図８　主要家畜の飼養頭数の推移



資料：Statistics NZ

2015 年６月末時点の肉用牛飼養頭数は、長期的な減少傾向に加え、輸出需要の高まりを受けて肉用牛のと畜が増加した影響から、354 万 7000 頭（前年比 3.3%減）と減少傾向が続いている（表３）。

表３　牛飼養頭数の推移

（単位：千頭）

区分／年	2010	2011	2012	2013	2014	2015
肉用牛	3,949	3,846	3,734	3,699	3,670	3,547
うち繁殖雌牛	1,118	1,053	1,060	1,019	1,012	982

資料：Statistics NZ

注：各年６月末時点。

② 牛肉の需給動向

ア　生産動向

牛肉生産量の長期的な推移を見ると、2000 年代前半まではおおむね増加傾向にあったが、その後は飼養頭数の減少とともに減少が続いており、2010／11 年度以降は 60 万トンを切る水準で推移している。

しかし、2014／15 年度は、成牛と畜頭数が、北島の干ばつと､輸出需要の高まりに伴い増加したことで、272 万 2000 頭（前年度比 13.2%増）とかなり大きく増加したことに伴い、66 万 1000 トン（同 10.5%増）と 5 年ぶりに 60 万トン台を記録した。

イ　輸出動向

2014／15 年度の牛肉輸出量は、牛肉生産量の増加に伴い、43 万 2000 トン（前年度比 10.5%増）となった（表 4）。

輸出地域別に見ると、最大の輸出先である米国を含む北米市場向けは 24 万 8900 トン（同 21.5%増）と大幅に増加した。北米市場向けは、加工用牛肉が主体であり、乳用経産牛のと畜頭数の増加に伴い増加している。さらに、米国が干ばつ後の牛群再構築の時期に当たり、国内生産が減少していることも、輸出量の増加を後押ししている。また、北米に次ぐ輸出先である北アジア市場向けは、これまで見られた急激な増加傾向は鈍化しているものの、中国を中心に 12 万 2900 トン（同 8.6%増）と増加している。

表４　牛肉需給の推移

（単位：千頭、千トン）

区分／年度	2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15
成牛と畜頭数	2,381	2,192	2,374	2,403	2,722
子牛と畜頭数	1,656	1,694	1,935	2,129	2,120
牛肉生産量	596	575	598	599	661
子牛肉生産量	27	28	31	34	34
牛肉輸出量	356	351	367	391	432

資料：Statistics NZ、Beef ＋ lamb NZ「Annual Report」
注１：年度は 10 月～翌９月。
　２：と畜頭数の単位は千頭。
　３：生産量および輸出量の単位は千トン。
　４：生産量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース（子牛肉含む）。

③ 肉用牛価格の動向

ＮＺでは、生産された牛肉のうち約 9 割（枝肉重量ベース）が輸出に仕向けられることから、同国の肉用牛価格は、輸出先の経済状況や、主要決済通貨である米ドルや英国ポンド､ユーロに対するＮＺドルの為替、また、最大の輸出市場である米国国内における牛肉の生産や価格の動向に左右される傾向がある。

輸出用肉用牛の生産者手取価格は、米国や中国からの堅調な需要により、2010／11 年度以降、比較的高い水準を維持しており、2014／15 年度は、1 頭当たり 1144ＮＺドル（前年度比 25.9%高）と大幅に上昇した（表 5）。

表５　輸出用肉用牛の１頭当たり手取価格の推移

（単位：ＮＺドル／頭）

区分／年度	2010/11	11/12	12/13	13/14	14/15
生産者手取価格	971	1,016	933	909	1,144

資料：Beef ＋ lamb NZ「Farm Facts」
注１：年度は 10 月～翌９月。
　２：皮革を含む。